

商業施設

2015
08

商業を多面的にとらえた総合情報誌



和傘 演/遊

継承～伝統とは革新の連続～

西堀 耕太郎

Nishibori Kotaro

(株) 日吉屋 JCD担当窓口
〒602-0072
京都市上京区寺之内通堀川東入百々町546
TEL 075-441-6644
info@wagasa.com
http://www.wagasa.com



「ご職業は」と問われて「和傘屋です」と答えると、10人中8人の方が「ああ、和傘屋さんですか」と返ってくる。いかに和傘というものが日常からかけ離れた存在になってしまったのか、これでお分かり頂けるだろう。「いいえ、和傘屋です」と再度伝え、次に帰ってくるのは「和傘……ああ、ご実家を継がれたのですね」だ。これにも私は「いいえ」と答えなければいけないのだが、このエピソードは家業でなければ誰も和傘屋になろうなどとは思わないという事を如実に表していると思う。

私は和歌山県新宮市出身で、父は英語塾経営を経て現在は理系の産業翻訳をしている。ちなみに私の前職は公務員だ。和傘どころか京都出身ですらない私が、ではどうして和傘屋を営むようになったのか。それ

は結婚した相手の実家が「京和傘の日吉屋」だったからだ。しかし、私が実際に妻の実家の家業を認識したのは結婚してからのことで、当時公務員だった私はまさか5年後に自分が和傘屋になろうとは夢にも思わなかった。

結婚後、妻の実家に入り用になるようになった私は、ある日工房で作りかけの和傘を目にする事となる。それは番傘と呼ばれる雨傘なのだが、当時の私はそれが番傘なのか蛇の目傘なのか全く分らなかった。分かったのは、それが和傘だということだけだった。そして、それを美しいと……いや違う。当時の私はそれを「シブい」と感じたのだ。

私は高校卒業後カナダに1年留学した経験があるのだが、その時、自分がいかに日本の文化について何も知らないで生きてき

たのかという事を痛感した。日本にいれば当たり前目の前にある工芸品。しかし、その技術が気の遠くなるほどの年月を経て確立したものであり、その技術を継承する為にどれだけの鍛錬が必要なのか。まだ10代だった私は全くの無知だった。

さて話は戻る。結婚当初24歳だった私が「シブい」と感じるのだから、和傘には可能性があるのではないかと。無謀にもそう思った私は、まずこの素晴らしさを広く知らしめる為、まだダイヤルアップ回線時代に日吉屋のHPを作成した。ショッピングカートも無くメールの平文で注文を頂く形式から始まったのだが、これによって潜在需要を発掘した日吉屋の売り上げはV字回復した。実は日吉屋を継ぐと皆に宣言した時、私の父母のみならず妻の母にまで反対をされた。

当時の日吉屋の売り上げは100万そこそこ。どう考えても廃業するしかない状態だったのだ。

しかし、売り上げは大幅に回復したものの、潜在需要発掘パブルは長くは続かない。3年もすれば底をつく。そして今ある需要もいつまでであるか分からないのだ。そう考えた私は、ある日、太陽の光を透かした和傘の美しさに気づき、これを照明にできないものだろうかと思いついた。照明デザイナーの助力を得ることができたお蔭もあり、試行錯誤の末、ようやく生まれたのが和風照明「古都里-KOTORI」だ。

最初の御購入者の事は今でも記憶に残っている。とある雑誌に取り上げられた古都里があるインテリア事務所社長の目に止まり、ホテルのエトランスに、シャンデリア

のように設置して頂けたのだ。

照明を考案するに当たり私が気に掛けたこと——それは海外にも通用するデザインだ。せっかく和傘という日本の伝統工芸からなる商品だ。これを海外に広めない手はない。そう考えた私は2008年1月にパリで開催されている世界最大のデザイン・インテリアの国際見本市メゾン・エ・オブジェに「古都里-KOTORI」を展示した。その後もフランクフルトで2年に1度開催される世界最大の照明関連見本であるライト&ビルディングに出展し、中国のスターバックスの内装を手掛ける企業と出逢い、店舗用ライティングとして採用されるに至った。

2014年、京都にオープンしたザ・リッツ・カールトンホテル——その1FエントランスとB1日本食料理店に弊社の照明が

採用され、日本人は勿論、外国人宿泊客にも好評を博している。照明などこの世に数限りなくある。ではなぜリッツは弊社の照明を採用してくれたのだろうか。おそらくそれが京都の伝統工芸からなるものであること。そして外国人の目から見ても美しいと感じられること。京都という立地と世界中に顧客を持つリッツの求めるコンセプトが弊社の照明と一致したからだろう。

最初に私の職業は和傘屋だと述べたが、近年そこに「照明屋」という職業が加わった。京和傘の技術を継承するため、和傘から生まれた照明は、今では和傘の売り上げと同等を占めるまでに成長した。職業などどうでもいいのだ。大事なのは京和傘の技術を継承し、次世代に引き継ぐこと。これに尽きる。